

# 打倒大村工で レベルアップ

「負けられない」。県内でしのぎを削ってきたチーム同士のライバル意識が選手たちを突き動かしていた。大村市開催のソフトボール男子で、4強を長崎県勢3校が占める快進撃。1日で2試合という大会第3日を迎え、越えた大村工、佐世保西、島原工の各チームは、虎視眈々と頂点を見据える。

県勢はこの全国選抜大会で2012年から44連勝をマーク（18年は悪天候で準決勝以降が打ち切り、20年はコロナ禍で中止）。21年の準々決勝で連勝記録は止まったが、22年は大村工が大会最多となる8度目の優勝を果たした。

大村工が絶対的な強さを誇る中、県内他校の共通認識は「日本一のチームを倒さなければ全国に行けない」。目線を上げて練習を重ね、レベルアップに励んでいる。そして今回、地元開催で出場枠が増え、力を示すチャンスが巡ってきた。

佐世保西は日本代表の現エース小山玲央（平林金属）を擁して初優勝した16年以来的出場。その小山も応援に駆けつけた中、前々回覇者の啓新（福井）との3回戦は延長九回タイブレークの熱戦を制した。準々決勝は昨夏8強の豊川（愛知）

## ハイライト

を倒した。主将の坂本は大村工に負けていないというプライドを持って練習しているからこそ、「ここまで戦えているんだと思う」と言葉に力を込めた。

県予選を制した島原工は組み合わせが決まったときから「決勝で大村工を倒して日本一」を掲げてきた。その目標に向けて、この日も大黒柱の橋本が2試合で計13回186球の熱投。3回戦で伝統校の飛龍（静岡）に競り勝つと、準々決勝の松山工（愛媛）戦は野手陣が奮起して7点を奪い、エースを援護した。

準々決勝の二回、適時二塁打を放った橋本は「何とかして橋本を助けたかった」。橋本も「県一位としての意地を見せる」と気持ちを奮い立たせていた。

連覇を狙う大村工はここまで危なげなく勝ち上がってきた。3回戦、準々決勝ともに序盤から主導権を握り、堅守で逃げ切った。いずれも先発登板し、計5回無失点で流れをつくった右腕横石は「強気の投球ができた」。主将の宮野は「ワンプレーの重みを大事に、チーム一丸で戦いたい」と気を引き締め直していた。

最終日はまず準決勝で県勢対決が実現する。大村工の山口監督は「各指導者の熱意、学校の協力、地域の支えがあつてこそ」と喜び、静かに燃えている。地元への応援も背に、全国の頂点を懸けた戦いはいよいよクライマックスを迎える。

（松本文泰、中島宙）



【ソフトボール男子3回戦 諫早―熊本工】7回表 諫早1死、久田が内野ゴロに倒れる  
大村市総合運動公園

# 諫早は惜敗 8強にあと一步

○ソフトボール男子の諫早は3回戦で熊本工に0―1で惜敗。相手エースの島田に無安打無得点に抑えられたが、塚原監督は「苦しい中でも守備は大崩れをせずに頑張ってくれた。いい経験ができた大会だった」と男子部員11人で8強にあと二歩まで迫った選手たちをねぎらった。

26日の2回戦で2安打完封したエース久田は、この日もストライク先行とテンポを意識して好投。一回、先頭打者に三塁打を許した後、次打者を追い込みながら暴投で1点を失ったが、以降は打たせて取る投球で散発2安打に抑えた。バックも懸命の守りでエースを支えた。ただ、最後まで打線が振るわなかった。

試合後、選手たちは車座で次の目標を話し合った。主将の新井は「春1勝は自信になったが、守備でミスもあったし、攻撃はヒットなし。投打にレベルアップして県高総体を迎えたい」とチームの思いを代弁した。

（濱崎武）

## 一般女子

陸上の第42回やまぎの里波佐見ロードレースは21日、東彼波佐見町育センター前発着コースで行われ、一般女子10は永友優雅（南島原市協）が33分48秒の大会Vを飾った。高校男子

# 山下 世界

定



日本陸上競技連盟は、8月下旬にハンガリー・ブダペストで行われる世界選手権のマラソン日本代表を発表し、男は山下一貴（三菱重工）ら初出場の3人が選ばれた。9〜10月の中国・杭州アジア大会代表も同時発表し、男子で定方俊博（同）が選出された。

山下は瓊浦高、駒大出身の25歳。今月5日の東京マラソンで日本歴代2位となる2時間55分5秒をマークして、日本勢トップゴールした。2004年パリ五輪の代表選考レース、マラソングランドチャンピオンシッパ（MGC）が10月15日に控えており、世界選手権